

第二百四十話 作戦用地図問題：現地部隊の苦労、察するに余りある！

軍事作戦に地図情報は必須である。それは過去も現代も同様だ。現代ではGPSの精度が作戦行動に大きく影響する。GPSも偵察衛星もない時代の紙の地図をどのように収集或いは製作、頒布しようとしたのだろうか？興味をそそられるテーマだ。大東亜戦時における紙情報の地図の有無、適時の部隊交付状況、正確性等は寒心に堪えない。良くぞ、これで戦ったものだとの感を強くする。



1 地図作成機関等

明治建軍来、陸軍は参謀本部の外局である陸地測量部、海軍は海軍省の外局である水路部がそれぞれ陸地図、海図の制作を担当していた。両者の連携は良かったとの証言がある。各国・各地に展開した大使館付武官、特務機関等の他、特別任務を付与された将校等が各種の情報収集に任じた。対ソ作戦計画に資する兵要地誌調査中の中村大尉が張学良軍に殺害された事件（1931/6/27）は、情報収集の厳しさを思い知らされる。

2 支那事変における地図

支那派遣方面軍には野戦測量隊が編成されていた。日本軍は、地図を押収した。特に南京陥落時（1941/12/13）に、中華民国参謀本部陸地測量総局で押収した各縮尺の地図は、殆ど全土を網羅していたという。各野戦測量隊は、空中写真測量により地図を整備した。兵要地誌の需要も急増し、測量部は天手古舞だったという。

3 対米英戦開戦前に地図の準備がないという啞然たる状況

作戦地域の地図の準備も泥縄と云える状況であったと云う。1941(S16)年以前の発行は、ビルマ・マレー半島・北ボルネオ・スマトラ・セレベス等に限られていた。大多数の外邦図の発行は1942～1944(S17～S19)に集中しており、開戦間際に入手したか、開戦直後に現地で鹵獲した地図を基にしている。

陸地測量部が刊行した戦域の地図は、「印度測量局」「蘭印測量局」「米地質調査所」等々の現地発行の地図、その他民間の地図等を殆どそのまま複製していた。開戦前に大使館付武官等を通じて地図入手の努力をしていることも付記する。

海軍が敢行した真珠湾奇襲でも、事前に最新の地図を収集していなかった。1930年測量のオアフ島の地図は陸地測量部が入手していたが、軍事施設の記載はない。但し、在留邦人や武官等の情報は得ていたのは間違いなからう。

4 海軍第二段作戦に資する各島嶼の揚陸沿岸の状況や地形図も準備なし

ソロモン諸島やニューギニアの地図は、1942(S17)年7月以降逐次に発行された。これらは豪製地図の複製である。

5 作戦用地図の部隊交付に難

押収地図等の複製・製作地図が現地部隊に適時に交付されていないという状況が頻発したという。作戦地図の慢性的な不備・不足に現地部隊は終始悩まされた。

ガ島の関連地図が発行されたのは、既に撤退した後の1943/3/25である。

6 野戦測量隊の編成・派遣

1942年には、シンガポール、フィリピン、ラバウル、スマトラ、ジャワに野戦測量隊が派遣され、空中写真の地図作成、現地測量に任じた。

7 戦争の進捗に伴い水路部の職員数の激増

拡大する作戦海域の急速測量と作戦に即応する気象・海象の資料提供のため、水路部の陣容も急速に増大せざるを得なかった。S8に544名、S19には5280名まで増えた。陸地測量部も同様である。

* 準備不十分な状況で戦いを強いられたが故の地図問題だ。